



▼ロンドンのデイ・センター



▲コペンハーゲンの老人の町

## ヨーロッパの老後

松下敏郎

ヨーロッパの老人ホーム、私の見た限りそれは一言にいえば全くホテルのよう、いやホテル以上に思われました。もちろん各国で一番上等なものを視察したからだとは思いますが、大部分のものは個室、私物の持込みは自由、広々と清潔でゆったりとし、経済福祉は申し分ないとうかがわれました。わが国の老人ホームは低所得層を対象とする施設からスタートしたため、まだ保護施設的「収容の場」の色彩が強いわけですが、ヨーロッパのそれは居住性が高く、老人の心身機能に応じて手厚く世話をするいわゆる「生活の場」が実現されており、

このことは、根本的には年金制度の発達の度合いによるものと思われ、ヨーロッパ各国においてはすでに年金制度が六十～八十年以前から発足し、国によって異なりますが、六十五歳になればインフレとはいえ月額五、六万円の老齢年金が支給されており、従って老人は個人のたくわえもありませんし、また一方住宅も整備されており、それに対し外部からはホームヘルパーの派遣とか給食サービスの提供とかいろいろの援助をする。そうして自分ではどうにもならなくなつてやっと老人ホームに入るか、または自分の意志で老人ホームへでも入ろうかと

いうことになるわけです。この場合年金受給権は国へ返上しますが、ホームからは、小遣いとそれ以上のサービスを受けられます。

いわば自分の金でホームへ入るという意識が根底にあり、わが国のようにお上の世話になる、また世話をしてあげるという観念が全くないわけでは、このような意味から、わが国の老齢年金がヨーロッパなみに一日も早く完結することが熱望されるようです。

老人には経済(所得)、身体(疾病)精神(孤独)の三つの問題があるといわれております。ヨーロッパにおいては最初の二つの問題は一応解決されており、最後の孤独の問題だけは、どうにもならない残された問題のようです。生命をかけて自由を獲得した伝統のある国、そこには老人がどんな孤独な生活をおくっていても他人の介入を許さない、最終的には個人の問題であるという割り切り方が働いているのでしょうか。孤独という問題は心の問題であり、なかなかむずかしい問題ではあります。しかしながらわが国においては、東洋の日本国においては、ヨーロッパとは異つた家族を含めたコミュニティ・ケアによる何等かの解決方法が見出されないものでしょうか。

このことは、根本的には年金制度の発達の度合いによるものと思われ、ヨーロッパ各国においてはすでに年金制度が六十～八十年以前から発足し、国によって異なりますが、六十五歳になればインフレとはいえ月額五、六万円の老齢年金が支給されており、従って老人は個人のたくわえもありませんし、また一方住宅も整備されており、それに対し外部からはホームヘルパーの派遣とか給食サービスの提供とかいろいろの援助をする。そうして自分ではどうにもならなくなつてやっと老人ホームに入るか、または自分の意志で老人ホームへでも入ろうかと

このことは、根本的には年金制度の発達の度合いによるものと思われ、ヨーロッパ各国においてはすでに年金制度が六十～八十年以前から発足し、国によって異なりますが、六十五歳になればインフレとはいえ月額五、六万円の老齢年金が支給されており、従って老人は個人のたくわえもありませんし、また一方住宅も整備されており、それに対し外部からはホームヘルパーの派遣とか給食サービスの提供とかいろいろの援助をする。そうして自分ではどうにもならなくなつてやっと老人ホームに入るか、または自分の意志で老人ホームへでも入ろうかと

(福祉生活部長)

海外レポート・overseas report・海外レポート・overseas report

海外レポート・overseas report・海外レポート・overseas report

## 公害先進国「日本」

毛利邦郎

県の第一回海外研修としてヨーロッパにおける公害対策を視察する機会を与えられましたので、その時感じたことなどご紹介してみたいと思います。

人間の価値観が量から質へと大きく転換しつつある流れの中にあつて、公害あるいは環境問題も次第に関心が高まりつつあるものの、経済成長の速度や自然的、社会的条件の相違もあつて一般的にはまだ関心が低く日本のようにマスコミを連日賑わせる様な状態ではないようです。

勿論、一部の国では、それらの対策の必要性が認識され規制やその他の対策が進められつつあるようです。

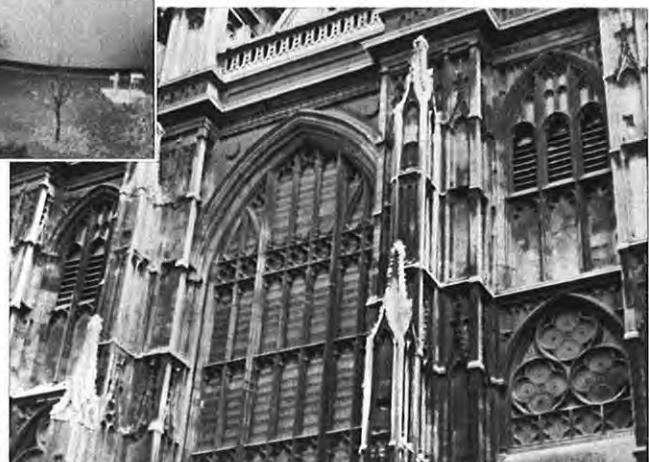
ヨーロッパで最も対策が進んでいると云われるイギリスでは、各種公害を規制する法律が制定され、これらによってある有名な「ロンドンスモッグ」も最近では鳴りをひそめています。ロンドンの古い建物に一樣にしみついた黒いスモッグがマダラ模様になつてはがれつつあるのが随所に見受けられますが、ここに至るまでには十五年の歳月とはく大な経費をかけた八〇%の家屋の暖房用燃料を石炭から無煙燃料に切り替えさせ、やつと数百年来のスモッグを追放することができたこと云うことです。

一方、テムズ川についても一九〇〇年代の初めから急激に進んだ汚濁が排水規制と下水道の普及によってここ十年間に次第に浄化され、見かけ上は決して美



▲西ドイツビッテンの下水処理場

▼建物にしみついていたロンドンスモッグの遺物「煤」も次第になくなりつつある



(公害規制課長補佐)